

## 第130回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、5月10日(水)、減災館1階減災ホールにおいて、第130回防災アカデミーを開催しました。今回は、熊本県阿蘇郡西原村役場総務課(震災復興推進室兼務)の倉田英之氏が「熊本地震『震度7』～想定外を想定内に」と題した講演を行い、当日は162名の参加がありました。倉田氏は昨年4月に発生した熊本地震の際



講演する倉田氏

に、西原村でただ一人の防災担当として、被災者の支援や復旧に尽力されました。その経験を踏まえて、いつ来るかわからない災害に備え、何をしておくべきかについて講演されました。

西原村は阿蘇山の外輪山に隣接する人口約7,000名の小さな村で、今回の地震では集落の7割以上で全半壊率50%以上という大きな被害を出しましたが、住民同士の助け合いによって直接の死者は5名に留まりました。復旧も比較的順調に進み、昨年11月18日には住民の自主的な判断で公的避難所を閉鎖することもできました。講演では、その要因として、消防団を中心とする地域コミュニティの力と、2年に1度全村を挙げて実施する防災訓練があること、訓練への参加者は毎回2,000名を越えること、被害は想定外でもそれに立ち向かう村の力が日頃から培われていたことが、いざという時の結果に繋がったのだということが述べられました。

## 第72回げんさいカフェを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、5月15日(月)、減災館1階減災ギャラリーにおいて、同センターの研究者と市民とが減災の最新研究をテーマに対話する月に1回のサイエンス・カフェ「げんさいカフェ」を、南海トラフ広域地震防災研究プロジェクトとの共催で開催しました。

毎回、隈本邦彦同センター客員教授がファシリテータと



げんさいカフェの様子

なって、一般の参加者と研究者との対話を盛り上げます。今回のゲストは平井 敬環境学研究科助教で、テーマは「古文書にみる地震災害」でした。

平井助教は、同センターの教員や学生らでつくる「古文書勉強会」の成果の一部として『小川家文書(本学図書館所蔵)』と『道德前新田御用留(徳川林政史研究所蔵)』にある安政の東海地震・南海地震に関わる記述を詳しく紹介しました。このうち尾張藩士小川円次郎家に伝わる文書群『小川家文書』には、二つの地震の被害が地域ごとに事細かに記されており、寺社の被災状況等からおおよその震度分布の推定もできたということです。また尾張の国塩田村の豪農・鷲尾善吉が開発した新田についての藩の記録『道德前新田御用留』には、安政東海地震の際に農民らが協力して津波の浸水を防ぎ藩から褒美をもらったという、これまで知られていなかった事実の記述が見つかったということです。

こうした古文書の記述は、あくまで主観的なものですが、地震で人間社会が受けた被害の様子や、当時の人々の対応などがわかる貴重なものです。それを生かした歴史地震研究が将来の減災に役立つと期待されています。今回も60名余りの参加があり、たくさんの質疑応答が行われました。